

堀  
辰雄

プルウスト雑記





プ  
ル  
ウ  
ス  
ト  
雑  
記

神西清に

一

今朝、僕はこんな夢を見た。

僕はひとりで活動小屋にはいった。僕はうっかり眼鏡めがねを忘れてきたことに気がついた。いつもなら活動小屋の一番後の席に坐るのだが、しようがないので僕はずっと前の方へ出て行った。そうしたら、やっとスクリーンの

一九三二年七月七日

絵が見え出した。それにはなんだか妙に美しい色彩がついていた。そして沙漠のようなところで獣めいたものが格闘しているのだった。……

僕は眠りから醒めてからも、その夢を鮮明に記憶していた。そして煙草を啣えたまま、しばらくぼんやり籐椅子とういすに凭もたれているうちに、ふと数年前、この夢とほとんど同じような現実の経験をしたことのあるのを思い出した。僕はその時もやはり眼鏡を忘れたまま活動小屋にはいったのだった。ただ夢とすこし異ちがうのは、その頃はまだ活動小屋にもオオケストラ・ボックスがあつて、そのままわ

りには子供たちが大ぜい群がっていたが、僕もその中に混って行って、半分はそのボックスの中を珍らしそうにのぞきながら、半分は筋などは何が何やら分らずにスクリーンを眺めていた。

そういう夢と、その動機とも見えるような過去の経験とを、代る代る思い浮べているうちに、僕はなぜかしらとても上機嫌になってきた。そして僕は突然、それが数年前の自分がオオケストラ・ボックスの中をのぞきこみながら漠然ぼくぜんと感じていた、妙よろこに悦ばしいような感情に酷似しているのに気がついた。——それは僕の幼時の追

憶から生ずる特異な感情にちがいなかった。というのは、そんな風にオオケストラ・ボックスの中をのぞきこんでいることが、いつもそうしていた子供の頃の僕に、その時の僕を立戻らせてしまっていたからだった。そしてそんな僕には、僕の幼時の全体が、——「ジゴマ」だの、「名金」だの、レストランではじめて食べた蝦フライえびの匂だの、ふだんはどうもよく思い出せないでいる死んだお母さんの声だのが、思いがけずはつきりとうか泛んで来ていたからだった。……

僕は今朝の夢のおかげで、それらの過去の経験の一切



を知らず識らずの裡うちに再び思い出していたのだ。それで今朝はこんなに機嫌がよいのだ。

\*

なぜこんな夢の話に君にしだしたのか、君にはもう解っているだろう。そう、君の御推察のごとく、たしかにこの夢にはプルウストの影響がある。そしてそれからそれへと僕は最近読み出しているプルウストのことを考えているうちに、なんだかとても君に手紙が書きたくなっ

た。と言ったからって、何もプルウストのことを君に話して聞かす自信があるほど、僕はまだ充分には読んでいない。君のところからプルウストの本を腕一ぱいかかえて借りて来たのはもう数週間前だが、僕の佛蘭西語フランスのあまり出来ないことは御存知のとおりだし、それに第一あのプルウストの難解な文章だろう。おまけにそれが小さい活字でぎっしり組んであるので、（これは余談だが、誰やらがうまいことを言っていた、プルウストの小説は、他の作家のものがすべて時や分を記述するのとは異り、秒を記述しているのだから、ああいう小さい活字で組ま

なくつちや感じが出まいと。)一日に一頁読んだだけでも大抵たいていがっかりする。とても、どの一冊だって初めから終りまで通読しようなんという気にはなれない。だから僕は手あたり次第に一冊引っこ抜いては、出まかせに開けた頁を読むことにしている。こうして読むと割合に倦あきずに読める。——すこし乱暴なようだが、その後N・R・Fのプルウスト追悼号の中でヴァレリイがプルウストの作品はどこから読み始めてどこで切っても差支えのないものだと言っているのを発見して大いに意を強くしたね。追悼号と云えば、あれで見ると佛蘭西の歴れつきとした

文人たちも、プルウストを読むのにかなり閉口したらしい、中でもルネ・ボワレエヴという作家などは、最初は「スワン家の方」をどうしても読み通すことが出来ないで途中で投げ出したが、シャルル・デュ・ボスの「アプロクスイマシオン」の中の原文からの引用の豊富なプルウスト論を読んで、非常に興味を感じ出し、それから一息に七冊ばかり読み通してしまつたと白状している。(シャルル・デュ・ボスのそのプルウスト論は僕も読んで見たが面白いものだった。)——とにかく本場の佛蘭西人さえプルウストには手古摺てこずっているらしいので大いに僕

も意を強くする。

数日前、僕はある場末の古本屋からN・R・Fのジャック・リヴィエール追悼号を十銭で掘出してきたが、その中にリヴィエールがどこかでやったプルウストに関する講演の原稿が載っているので、早速読んで見たが、リヴィエールもやはり平素音楽的な文体が好きだったので、プルウストの、「まるで引き伸ばして頁の隅々にピンで留めたような文体」には散々悩まされたことを告白している。後年あれほどのプルウスト<sup>びいき</sup>眞<sup>まこと</sup>眞<sup>まこと</sup>になったこの人までが、それなのだからね。

このリヴィエールのプルウスト論、それにさつき挙げたシャルル・デュ・ボスの奴とが、先ず、僕の読んだもののうちでは、プルウスト論の雙璧そうへきだろうね。これらに比べると、バンジヤマン・クレミュだとか、レオン・ピエール・カンなどのものはすこし落ちるようだ。――が、君に借りてきたロベエル・ドレイフユスの回想記のなかで僕はひよっくり面白い一節を見つけた。プルウストがその第一作、「スワン家の方」を世に問うた時、ルタン紙の記者が早速彼を訪問して彼に感想を乞うた。そのときの談話筆記が、そのままそこに再録されてあるのだ。

これは掘出物だと思う。——僕はそれを読むまでは、プルウストの批評といえ、かならず時間を論じ、ベルグソニスムを論じ、あるは無意識を論じているのを、これは一つの流行かと思っていたが、何んとその流行の創始者が当のプルウストであるとは知らなかった。で、そのマニフェスト(?)なるものはどういふものかと云うと、先ず、彼は彼の彫大ぼうだいな小説を分冊にして出さなければならぬことを遺憾とし、「自分は今日の آپアトメントには大きすぎる絨毯じゆうたんをもっているのです、それを切断すべく余儀なくされているものだ」と云っている。さて彼は

続けて云う。「平面幾何学というものに対して、立体幾何学というものがあるように、自分にとっては、小説は平面心理学であるのみならず、立体心理学なのである。

(この訳語はいささか妥当でない。前者の *la géométrie dans l'espace* という術語に対して *la psychologie dans le temps* という新しい術語を使用しているのだが適当な訳語が思いつかないので仮りにこう訳す。)——時間の見えざる実在、それを私は孤立させようと試みるのだ。そのためには経験が持続していることが必要だ。」それで彼の小説は長ければ長いほど完全に近くなるという訣わけな



のだ。そして更に続ける。「自分が希望するのは、自分の小説のおしまいの方で、この小説の始まりのところでは全然別箇の世界に住んでいる、さまざまの人物の間のごく小さな事件が、時間の経過した結果として、あのヴェルサイユ宮殿の緑ろくしよ青のついた鉛のもっているような美しさを所有するようになることだ。」——これはたとえば、第一巻の「スワン家の方」あたりではまだ全然別箇の世界に属するものとして作者から示されているスワン嬢とサン・ルウとが、最後の巻になって（それもごく自然な順序をたどりながら）遂に結婚するに至ることな

どを暗示しているのだろうか、まあ何という遠大な計画をたてたことか！　僕らなんかだっただとえそういう構想を思いついたにしろ、とてもそれに取りかかってその十分の一だけでも書き上げる根気すらなさそうだ。第一、誰も相手になぞしてくれまい。それはプルウストだつて、——最初の一巻「スワン家の方」を出したただけでは、そんなことを世間にいくら言っても、誰にも聞いて貰えそうもないことは知っていただろう。事実、このルタン紙上の一文はその当時は一笑に付せられたらしい。だが、彼はそれから十年間というもの、あの有名なコル

ク張りの病室に閉じこもったきり、死の直前まで黙々と仕事を続けて、遂にそれを全部完成してしまったのだ。リヴィエエルのいわゆる「彼の宿命のごとく思われる受動的なるものを能動的なるものに換えんとする努力」<sup>パッシイフ</sup>はかくして成就されたのだ。<sup>アクテイフ</sup>

僕がいまちよつと引用したりヴィエエルの言葉はなかなか面白いだろう。が、これはもつと説明する必要がある。それはこの次の手紙でもゆつくり書こう。今は、せっかく触れかかったのだから、もうすこしプルウストにおける時間の問題から離れずにいよう。

\*

プルウストがその作中人物を描く方法には、極めて多くの独創的なものがあるが、そのうちの最も斬新ざんしんな一つは、それは彼がその小説のなかに時間の経過する感じを与えようとしたためであることが解る。再びさっきのルタン紙上のインタヴューに戻るが、その中でこういうことを云っている。「汽車がうねりくねった線路を走っている間、ある時は右に、ある時は左に見える、あの小

さな町の中にでもいるように同じ人間が、まるで入れ代り立ち代り現われてくる別々の人間であるかのようには読者に印象されるほどの、ひとつ人間のさまざまな姿は——そのためにのみ——時間の過ぎてゆく感じを与え  
るものだ」

つまり、現実の中でもしばしば起ることであるが、いま自分の前にいる一人の人間が、ちよつと時間が経ちさ  
えすれば、それとはまるで異った人間のように印象され  
てくることがある。それがわれわれにはいかにも時間の  
過ぎつつあるということを感じさせる。——プルウスト

はそういう「強い、ほとんど無意識的印象」に目をつけて、それを彼の人物を描く方法に取り入れたのだ。たとえば、「スワンの恋」のなかに描かれているオデット・クレツシイだが、あれくらい時間の過ぎるにつれて刻々に変化する性格と容姿をもった、少々妖精じみたところさえある女性は、ちよつと類が無いではないか。なるほど、オデットはどこかしらモリエルの書いたセリメエヌに似ていないことはない。まあ、ああいったタイプの女にちがいない。しかし、それだっても、ボツチチエリイの描いたジエトロの娘に彼女が似ていると云うよ

り以上のことではない。そしてそういう聯想れんそうは、ただ、プルウストが彼の人物を生かすことの出来た手腕てんぱんにおいて、そういう大家たちの間に伍して少しも遜そんしよく色のなかったことを証明するようなものであろう。

プルウストの人物の描き方については、そういう際立った特徴に次いで、もう一つの特徴が認められる。そのもう一つの特徴というのは、——僕はこの間、コンブレエの教会での結婚式におけるゲルマント公爵夫人の顔をプルウストが描写している一節を読み返しながら、意外に思ったのだが、そこをずっと前に初めて読んだ時から、

僕はいつの間にか自分勝手にその公爵夫人の顔を世にも美しいものに作り上げてしまっていたと見える。だが実際は、そこには、むしろ苛酷かこくなくらいの筆で、ことさらにその「高い鼻、するどい眼、赤らんだ頬」を目立たせるような工合に、決して美しい顔としてでなく、夫人の顔が描かれてあるにすぎないのだ。僕はちよつと欺だまされていたような気がした。「これは僕がずっと前に読んだことのあるゲルマント夫人の顔じゃない」——だが、僕はその一節をすっかり読み畢おえてその本を開じながら、もう一度その夫人の顔を宙に浮べて見た。すると、どう



だろう。今度は、その高い鼻、碧あおい眼、赤らんだ頬がまだ僕の眼前に髻ほうふつしているにもかかわらず、その夫人の顔はだんだん前に増して美しく思われ出したのだ。「そう、やっぱり僕の知っていたゲルマント夫人だったんだ！」——そうひとりごちながら、ははあ、こんなところにも、プルウストの作中人物を解く一つの鍵があるのかも知れぬと思った。

シャルル・デュ・ボスが、オペラの棧敷さじきの中で捕まえられているのも、そういうゲルマント公爵夫人の感嘆すべき肖像画の一つだ。

彼女（ゲルマント公爵夫人）を、薄あかりを浴びて物語めいている他の娘たちよりも、ずっと上位に置いているその美しさというものは、彼女の頸や、肩や、腕や、胴などの上に、はっきりと、誰にもすぐ分るように、見えはしなかった。そしてそういう、彼女の微妙な、未完成な線は、われわれの目がそれを引き延ばさずにはいられない、見えがたい、不思議な線の正確な出発点であり、暗闇の中のスクリーンの上に完全な姿となって投影されているスペクトルのような、その婦人のまわりでぴちぴ

ち跳っている線のおのずからなる塊りであった。

そういう、われわれの目がそれから現実的<sup>レアル</sup>な線を引き延ばさずにはいられないような、不思議な、見えがたい線、そこにこそ、プルウストの目のみならず、彼の精神が絶えず追究していたところの実験があるのだ、とシヤルル・デュ・ボスは説いているのである。

\*

なんだかすこし尻切蜻蛉しりきれとんぼのようだが、ここいらで一度ペンを置く。が、僕は君にもっともっとしやべりたいところがあるのだ。僕はプルウストに関する著書が後から後からと出るのに驚いていたものだが、この調子なら僕にもそのうち一冊の書物ぐらいは書けそうな気がする。が、今日はもうへとへとに疲れた。当分僕のプルウスト熱はさめそうもないから、どうぞ次の僕の手紙を待っていてくれたまえ。左様なら。

## 二

七月十日

この間僕は本郷の古本屋でルノアアルのすばらしい画集を見つけた。そしてどうしてもそれが欲しくてたまらなくなつて、昨日、とうとうそれを買つてきた。

僕の買った画集は一九一三年、パリの Bernheim-Jeune 刊行のものだ。六百部の限定版。金がなかつたので、僕は仕方なしにそれまで大事にしていたデュファイとモディ

リアニの画集を売ってやっとなそれを手に入れた。

それほど僕はこのルノアアルの画集が欲しかったのだ。またしても、ここにプルウストの影響があるらしい。

それはちょうど、僕が昔コクトオに熱中しているうちにいつかピカソやキリコの絵を愛し出したのによく似ている。僕はこの頃プルウストのおかげですこし頭が古くなったのか、どうやら印象派の画家たち——ことにマネエヤルノアアルやクロオド・モネエの絵が非常に好きになって来たようだ。マネエなんかも好い画集があったら何とでもして買って来るだろう。ところで、こんな工合

に僕がコクトオを通してピカソやキリコの絵に興味を持ったり、プルウストの影響でルノアアル等が好きになったりするということは、それを裏がえしにして考えて見ると、コクトオはピカソやキリコ等の画家に、そしてプルウストは印象派の画家たちに多くのものを負っているようなことになりはしないだろうか？

僕はどこでもいいからプルウストの一面を開けて見よう。たとえばここに、こういう一節がある。

私はエルステイルの水彩画の中でこれらのものを見て

からというものの、私はこれらのものを現実の中に再び見出したく思いもしたし、また、何か詩的なものとしてこれらのものを愛するようにもなったのである。……まだ横に置かれてあるナイフのでこぼこな面<sup>おもて</sup>、日光がその上に黄いろい天鷲絨<sup>ビロオド</sup>を張りつけている放り出されたナフキンのふくらんだ突起、その形の気高い円味をかくも美しく見せている半分空虚<sup>から</sup>になったコップ（その厚いガラスの底の透明なことはまるで日光を凍らしでもしたようだ）薄暗いなりに照明<sup>あかり</sup>できらきらしている葡萄酒の残り、固体の移動、照明のための液体の変化、半分減った果物



皿の中で緑から青へ、それからまた青から金へと移る李すももの変化、卓の上に拵げられた布のまわりに日に二回は坐りにやってくる年老いた椅子たち、(その卓の上では牡蠣かきの貝殻のなかに、小さな石の聖水盤のなかにのように、数滴の水が残っている)——こういう今まではこんなものの中に美があるとは思ひもしなかつたような、もつとも日常的な事物のなかに、「静物」の深味のある生のなかに、私は美を発見しようとして試みるのであった。

「花さける少女の影に」Ⅱ

印象派の、まるでクロオド・モネエか何ぞの絵でも見ているような感じがしないか。——僕はプルウストをベルグソンやフロイドに結びつけて考えようとする人たちをよく見かけるが、僕にはプルウストは、そういう哲学者や心理学者たちよりもずっと深い暗示を、これら印象派の画家たちから得ているように思われるのだ。

\*

しかし、そういうのは僕がベルグソンやフロイドの著

書をあまり読んだことがないからかも知れない。もつとベルグソンやフロイドを読んだら（そしてそれを読みたいと思う欲望はこの頃しきりに起るのだけけれど）、そういう議論もうなづけるかも知れない。フロイドの方は知らなかったらしいが、プルウストは若い時分にベルグソンをかなり熱心に読んでいたようである。そして自分でも、この前の手紙に引用したルタン紙のインタヴューの中で、自分の小説を「ベルグソニスムの小説」と呼んでも恥しくないと言明している。ただ、それにこういう訂正をつけ加えている。「しかし、それは正確とは云え

ない。なぜなら、自分の作品は無意的記憶 (*la mémoire involontaire*) と有意的記憶 (*la mémoire volontaire*) との差別によって支配されているのだから。この差別はベルグソン氏の哲学に現われなかつたのみならず、むしろそれと矛盾さえしているのだ」

僕はベルグソンをよく知らないので、そういうプルウストの意向を充分に理解することは出来ない。だからそれに対する批評は控えよう。そしてここではただ、プルウストの謂<sup>い</sup>うところの「無意的記憶」なるものにちよつと触れて見よう。プルウストはそれを自分でこう説明し

ているのである。

「私には、有意的記憶——それは就なかんずく中理智の記憶だが——なるものは、過去の真実ならざる面をしか与えてくれないように思える。が、昔とはまったく異った環境の下で、ふと思い出されたある匂とか、ある味とかが、思いがけずわれわれに過去を喚び起すときは、われわれはそういう過去が、われわれの有意的記憶が下手な画家のように真実ならざる色彩をもって描いた過去とは、いかに相違しているかを理解する。諸君はすでにこの最初の巻「スワン家の方」において、話者がこんな話をするの

を御覽になるはずだ、——「私」（この私ではない）が突然、マドレエヌの一片の落してあるお茶の一口の味の中に、忘れていた多くの年月、庭園、人々を思い出すという話を。もちろん、彼はそれを有意的に思い出すことも出来ただろうが、その場合にはそれ独特の色彩もなければ魅力もないのだ。そして作者が彼をして云わしめ得たのは、薄い紙片を茶碗ちやわんのなかに浸すとすぐにそれが水中に拡がり、形をとり、花に變ずる、あの日本の小さな遊戯でのように、さまざまな人物、庭園のすべての花、ヴィヴオンヌ河の睡蓮すいれん、村の善良な人々や彼らの小さな

家々、教會、コンブレエとその近郊、それらすべてのものが、はつきりした形をとりながら、その茶碗の中から町となり庭となつて現われたということだ」

ベルグソンがこういう「記憶」の問題をどう取扱つて  
いるかと云うことを知れば一層興味がありそうに思える  
が、僕は残念ながらこの問題に今は立入れない。しかし、  
ベルグソンと云えば、僕は、数年前澄江堂の蔵書を整  
理しているうちに、ふとベルグソンの「形而上学序説」  
の英訳本の余白に見出した数行の書入れを思い出す。な  
んでもベルグソンの哲学は「美しい透明な建築を見るよ

うな感じだ」と云うような意味が記されてあったように記憶している。そして僕は長いことこの芥川さんの言葉を忘れていたのであるが、最近プルウストを読み出して、いるうちにひよっくりそれを思い出した。そういう全体の感じなどに、あるは、プルウストとベルグソンとはどことなく一味相通じたところもあるのかも知れない。

ある日、僕はもう一度その書入れを見たいと思つて、澄江堂に出かけて行つた。しかし書棚をいくら探して見てもその本はとうとう見つからなかつた。が、その代りに僕はサミュエル・バトラアの「Unconscious Memory」



という本を見つけた。ちよつと手にとつて見ると、ハルトマンの無意識哲学などを論じたものらしかった。僕はいまバトラアまで読んで見る気はしないので、一目見たきりで再びその本を元のところに入れて置いた。ベルグソンの本を探しさがしに行つてそれが見つからずに、バトラアを頭に入れて帰つてきたのはすこし妙な気持であつた。僕は家へ帰つてからも、なんだかそれが気になるので、手もとにあつたバトラアの「ノオト・ブック」を開いて見ているうちに、僕は図らずも興味深い数頁を発見した。その中でも一番面白いと思つたのは、彼の友人がある日

生爪なまづめを剥はがして突然子供の時分にそれと同じ経験をした時のことをそれからそれへと思い出す話を書いた「剥がした爪」という一章である。これを引用するとすこし長くなりそうなので、ここには省略するが、たとえば次のような簡単な話でもいい。

ある朝、私は「サウル」の中の“On Sweetest Harmony”の曲を口ずさんでいた。ジョンがそれを聞いて私に言った。「君はなぜその曲を口ずさんでいるのか知っているかい？」

私は知らないと答えた。すると彼は言った。

「二分ばかり前、僕が“Eagles were not so swift”を口ずさんでいるのを君は聞きはしなかったか？」

私はどうもその覚えがないし、それに私がその合唱を自分でやったのはよほど昔のことだったから、私がそれを意識的に認めていたとは考えられないが私がそれを無意識的に認めていたことは、私がその次にくる“On Sweetest Harmony”を口ずさんでいたことからして明瞭である。

バトラアは、こういう「無意識的なるもの」がわれわれの生の根元になっていることをハルトマンと共に言いたいのである。——少し道草を食ってしまったが、プルウストを論じてバトラアにまで及んだ者は、遺憾ながら、僕が最初の男ではない。バトラアの「ノオト・ブツク」の中でそんな発見をして僕は少し得意になっていた。ら、シャルル・デュ・ボスがすでにそのプルウスト論の中で、この二人を比較しつつ論じていたのであった。そしてこの分析好きの批評家は、そこでプルウストとバトラアとを同系統の分析家として取扱っているのである。

しかし「*The Way of All Flesh*」の作者はともかくも、プルウストをそのような分析家として解釈するのは、ちよつと僕には同意しがたいものがある。やはりジイドやリヴィエエルのように、プルウストには事物がひとりでにそういう風に——あたかも分析したかのように——見えたのだと解した方がよくはないだろうか？

——リヴィエエルと云えば、彼のプルウストに関する講演のことを書く書くと云いながら、いまだに約を果さずにいるが、この次にはきつと書くつもりだ。

## 三

七月十三日

この二三日、僕は君に約束をしたジャック・リヴィエ  
エルのプルウストに関する講演を、なにしろ長いものな  
ので、どうしたら一番要領よくその主要なところを話せ  
るだろうかと考えて見たんだが、どうも名案が浮ばない。  
しようがないから、僕はいつか引用した例の「彼の宿命  
のごとく思われる受動的パッシイフなるものを能動的アクテイフなるものに換

えんとする努力」というリヴィエエルの言葉を中心にして、特に興味深い数節を次に抄してお目にかけてよう。

——以下はそのリヴィエエルの講演原稿の大意である。

---

先ず諸君に、この世にひどく不釣合な、その挑戦に応ずることの絶対に出来ない、ある男の観念を与えなければならぬ。彼の性格のそういう外貌のすべては、私には

次のアネクドオトの中に要約されているように見える。

——ある夜、私は彼と一しよに真夜中近く彼のアパートメントを出た（それは彼が友人を訪問する時間だった）。彼の家政婦で女中で、そして秘書であるセレストが私たちについてきた。階段はペンキが塗り立てだった。プルウストはいきなりそのペンキに手を突いて、その手袋にぺったりそれを着けてしまった。すると彼はすぐセレストに向って優しい、くどくどした叱言こごとを云い出した。それを彼女は予防すべきだったとか、階段の塗りかえられてあるのを彼女はよく知っていたはずなのにか……。



彼はセレストの衝立ついたてだけがそのペンキから彼を保護した  
だろうことをどこまでも信じ切っているかのようだった。  
彼は、彼自身の方では、物事に働きかけることは愚  
か、それを防禦することさへ出来ないと思っ  
ていらした。

\*

彼の作品に何らの先入主なしに近づく誰でもを打つに  
ちがいない最初の特徴は、実にその密度であろう。諸君

はいま笑われた。なぜなら、まだ三頁も読まないうちに、多くの読者を中止させ、退屈だと叫ばしむるものがその密度だからである。

しかし私は、プルウストの作品の最も重要な特色を除いては、これをもってその主要なものとなすに躊躇ちゆうちよしない。その密度とは一体どんな性質のものかと云うと、——それを生じさせているものは、頁の各糲センチ平方の中に夥おびただしい量で塊まり合っている感覚、印象及び感動なのである。おそらく現実がかくも繊細な、かくも精密な方法で透視されたことは未だかつてあるまい。

まあ、コンブレエのこの一節を聞きたまえ。

空気（レオニイ叔母さんの部屋の）は、大へん滋養分のある、味のよい、沈黙の精のようなもので飽和されていたものだから、私はそこへは一種の強烈な食欲をもつて近づいて行った。ことに復活祭の休みの初めのまだ寒い朝々は、私がコンブレエに着いたばかりというせいもあって、私はそれを、一層よく味ったのである。私は私の叔母さんにお早うを云いにその部屋へ這入る前に、私はちよっと次の部屋で待たされるのであったが、そこに

はすでに二個の煉瓦れんがの間に火が熾おこされていて、その火の前にはまだ冬らしい日射しが温まりに這いよっていた。そしてそのため部屋中に煤煙ばいえんのほいがこびりついていた。まるで、田舎によくある大きな竈かまど口とか、古い館の暖炉の枠などのように。（そう云ったものの下では、人々は冬籠りの面白さを増さすために、戸外に、雪でも、雨でも、はたまた大洪水のような災害でもいいから起ることを願うものだが……）私は祈祷台と、いつもホツクでカバアをとめた、凹んだ天鵞絨ビロオドの肱ひじかけ椅子との間を رفتたり来たりしていた。その間、火はあの食慾をそそ

るような香り（それでもって部屋の空気はすっかり凝固していたが、ようやく朝のしっとりした、活気のある新鮮さがそれを揺り動かし、「立ち昇らせ」ていた）をパインのように焼きながら、それらの香りを薄く剥ぎ、金色にし、皺しわをよらせ、ふくらませていた。目には見えないが手で触れられなくもない田舎菓子、あの大きな饅頭まんじゅうのようなものにそれを仕上げながら。そんななかで、私は戸棚だの、箆たんすだの、壁紙だの、もつとしやりしやりした、もつと微妙な、もつと好評な、しかしもつともっと乾燥した匂いを嗅ぐや否や、私はいつも人知れぬ烈

しい欲望をもって、あの花模様のある寝台掛の、何とも云いようのなく汚れた、にぶい、不消化な、果実のような匂いの中に、再び身を埋めてゆくのであった。

「スワン家の方」Ⅰ

私が諸君に読もうと思っっているもう一つの一節は、ブルウストが數秒間のことを描写しながら僅わずか半頁足らずの中に收めることの出来た、感覺のみならず、感情の量をも諸君に感得せしめるだろう。それはオデットがとうとう打負かされてスワンの腕の中に身を投ずる瞬間だ。

彼は彼のもう一方の手をオデットの頬にそうて上げた。

彼女は彼を見つめた。あのフロレンス派の巨匠の描いた女たち（それに彼女がよく肖にていると彼の思っていた）の持っているような、物憂ものうげな、重々しい様子をして。

そして彼女の輝かしい、大きい、しなやかな瞳は、その眼瞼まぶたの線にひつついて、まるで二粒の涙のように彼女の頬から落ちそうだった。彼女は少し彼女の頸をかしげていた。あの基督教キリスト的であると同時に異教的な絵のなかですべての女たちがしているように。そしてそういう姿勢

は、もともと彼女には習慣的のものではあつたし、それにまたこういう瞬間にはそれが持つてこいであるのをよく知っていて、そうすることを忘れぬように心がけていたのであつたが、そういう姿勢のまままで彼女は自分の顔をスワンから離すために全力を出しているように見えた。あたかもそれが何かの見えない力によってスワンの方へ引き寄せられてでもいるかのよう。そしてそういう努力もとうとう空しかったかのよう。彼女がその顔をスワンの唇の上に落してしまわないうちに、それを少し離して、一瞬間、両手で支えていたのはかえってスワン



の方であつた。それは彼が、ちようど、自分の非常に可愛がつている息子の授賞式にあずか与るべく招よばれている両親のように、そこに駆けつけ、あんなにも長い間あこがれていたその夢の実現を目のあたりに見ようとする瞬間を、出来るだけ自分の心にとつて置きたかつたからだ。おそらくまたスワンは、まだ自分のものにしていない、まだ接吻をしていない、そしてそういうものとしてはもう見納めになるであろう、このオデットの顔の上に、ちようどその出発の日に、永久に立ち去ろうとする風景を記憶して置こうとする、あの旅人のようまなな眼ざしを注い

でいたのにちがいない。

「スワン家の方」Ⅱ

\*

かかる厚さ（彼の本の）は、防禦力を完全に取上げられた精神的組織に依って、あるいはそれを媒介ばいかいとしてのみ、生じ得るところの奇蹟だ。プルウストが人生からかくも驚くべき綿密さをもって印象を受け取ったのは、彼が決して人生と争おうとはしなかつたからだ。彼がこれ

だけ多くのものを得たのは、彼が最初何物をも欲しなかったからだ。

そう、私がさつき語った階段の降り方は、私にはますます象徴的に見えてくる。ペンキが彼の手袋にくつつくのは当然だったのだ。そして第三者のみが、その間に入って彼を保護し、彼の上への外界の粘着を禁じ得たのだ。もしもプルウストの作品の重要性和獨創性が解したならば、先ずそれが何物をも避け得ない者の作品であることを考えよ。

\*

しかし、われわれはプルウストの性格の中に、彼の根元的な消極性及び印象過敏性の一方に積極的な性質を認めると共に、われわれはそこに彼の作品の第二の相、彼の方法の別の独創性の現われるのを見逃してはならない。

手袋の上のペンキの汚点しみがある。しかし、一方にはまた、プルウストの強情、要求しそしてそれを手に入れるための彼の手腕、彼の貪慾どんよく、「彼の宿命のごとく思われ

る受動的なるものを何か能動的なるものに変えんとする「努力、外貌に対する不信任、最初差し出されたものよりもっと堅固なる何物かを捉つかまえんとする欲求、真理への熱情、があるのである。

コンブレエの一節を聞きたまえ。プルウストが感動に直面して本能的にとった態度、いかなる真に哲学的な欲求によって彼の驚くべき享受性が展開するか、諸君に理解させたい。

……突然、一つの屋根、一つの石の上の太陽の反射、

一つの小径の香りが、私を立止らせるのであった。それらのものが私に与えてくれるある特別な快さを楽しむために。それからまた、それらのものが私の眼に見えてくるものの彼方に何物かを隠しているような風をしていて（私にはいかに努力をしてもそれが発見できなかつたが）それを取りに来るようにと私を誘うので。そして私はそれらのものの中に確かに何物かがあるように感じたので、私はそこにじっと立止まっていた、動かずに、見つめつつ、呼吸しつつ、そして形イマアジユ象や匂の彼方に私の思考とともに行こうとしながら。そしてもしも私のお祖父

さんに追いつき、どんどん道を進んで行かなければならないような場合には、私は目をつぶりながら、それらのものを再び見出そうと努力した。私は屋根の線、石の色合いを正確に思い浮べようとして一所懸命になった。そしてなぜだか分らなかつたが、私にはそれらのものが今にも充ち溢れそうでもう半分開きかかつてい、そしてそれらのものがその覆いおおになっているところの、その中身をば将まさに私に手渡ししようとしているかのごとく思われるのであつた。

かくのごとく子供の頃から、プルウストは自分の中に世界を非常に蠱惑的こわくなるものとして受け入れると同時に、彼はそのものを理解すべく、そのものからそのもの以上の何物かを引き出すべく、「形イマアージュ象の覆いの下に」隠されている現実（物質的なものであるか観念的なものであるか彼は知らぬが）を発見すべく彼を駈かりやるところの——彼自身の言葉を借りれば——「困難な心の義務」を感じたのだ。

レイナルド・ハアンは「プルウスト追悼号」の中で、



実際においても彼がいかにその義務に忠実であつたかを示すところの、非常に意味深いアネクドオトを語つてゐる。

私の到着した日、私たちは庭園に散歩に行った。私たちはベンガアルの薔薇ばらの木の柵の前を通つた。そのとき彼は突然立止つた。私も足をとめた。がすぐ彼は歩き出した。私もそうした。すると彼はまた立止つた。そして私に、いつもの子供らしいすこし悲しそうな、やさしい調子で言った。「僕だけでもうすこしここにいても構わな

いでしでしょうか？　僕はもう一度あの小さな薔薇の木が見たいのです。」私は彼から離れた。小径の曲り角で、私は振り返って見た。マルセルは薔薇の木のところまで引返していた。館を一周して帰ってきた私は、さっきと同じところに彼がじっと薔薇を見つめながら立っているのを発見した。すこし首をかしげ、真面目そうな顔つきをして、彼は目をまたたいていた。いかにも熱心に注意しているらしく眉を軽くひそめながら。そして彼の左手で熱心に、彼の小さな黒いくちひげ口髭の端を自分の唇の間にはさんでは、それを噛かんでいた。私は、彼が私の足音を聞いて

私の方を見たように思ったが、彼は私に話しかけようともせず、身動きさえもしなかった。私はそれ故一言も云わずにその場を通り過ぎた。一瞬間がたった。マルセルが私を呼んだ。私は振り向いた。彼は私の方に走ってきた。彼はやっと私に追いつき、私が怒ってやしないかと私に訊いた。私は笑いながら、怒ってなどいないことを確めた。それから私たちは一時中絶していたさっきの会話を再び続けた。私はその薔薇のエピソードについては何も質問をしなかった。私はそのことで冗談も言わなかった。私はそんなことをすべきでないのを漠然と感じて

いたから……

\*

もしも私たちが次のような言葉を絶えず思い出さなかつたならば、何物をも理解し得ないだろう。「私はそこにじっと立止まっていた、動かずに、見つめつつ、呼吸しつつ、イマアジユ形象と匂の彼方に私の思考とともに行こうとしながら……」——もしも私たちが絶えず、この追求し、欲望する精神を感じていなかったならば……

リヴィエールはざっとこんな具合に論じながら、更に  
プルウストのこういうむしろ形而上的メタフィジックな傾向がいかにし  
てもっと実証的ポジティブな傾向に轉換して行ったか、そしてそれ  
があらゆるクラシックに共通するところの人間的要素を  
どんな風に彼の作品に与えているか、と云うことにまで  
説き及ぼしている。——そこまで抄すべきであろうが、  
僕はもうだいたいぶ疲れている。ここいらで不本意ながらペ

ンを置く。が、もつと不本意なことはこれでもって当分プルウストに関する手紙を打ち切らなくてはならなくなつたことだ。なぜなら、僕は九月号に小説を一つ引き受けてしまったからだ。しかし小説を書き上げてしまったら、軽井沢にでも行って、ゆっくりプルウストでも読んでやろうと思う。そうしたら、その時またこの手紙を続けよう。







日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館